

翻刻 国立国会図書館蔵山崎美成『猜彙』稿本

呉, 修喆
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7343507>

出版情報：言語文化論究. 54, pp.109-128, 2025-03-21. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



翻刻 国立国会図書館蔵

山崎美成『猜彙』稿本

呉 修 喆

文政八年（一八二五）春、江戸の雑学者山崎美成（一七九六一八五六）は滝沢馬琴（一七六七―一八四八）ら数名の江戸文人とともに、珍事異聞などを筆録し持ち寄って披露しあう「兎園会」を発起した。その二回目の会合で、美成は「隠語（かくしことば）」を披講し、中国の隠語や謎語などを集める『猜彙』という著作に言及している。その裏付けとして、彼の随筆『海録』巻十八の第五十五条「拙著目録」には「猜彙二巻」の題名が記されており、天保十一年（一八四〇）刊『三養雜記』の「字謎」条にも、「予かつて、和漢の字謎、離合詩、隠語の類を集め、二巻とし、猜彙と名づく」という割注が見える。

しかし、筆者が唯一実物を確認できた『猜彙』は、国立国会図書館古典籍資料室に所蔵される美成の自筆稿本で、一冊のみである。タテ約26cm×ヨコ約18cmの帙に収められており、帙の表面に「猜彙稿本 山崎美成」の題簽、背に「猜彙 全一冊」の書き付けが見える。本体は紙綴による結び綴じである。共紙表紙の左上に「猜彙」の二文字、表紙の裏打ちに「猜詩謎 西廂記第三巻」の文字が見える。全五九葉の内頁には計十一枚の別紙が貼り付けられている。

はたして二巻本の『猜彙』は存在するのか、今のところは定かではないが、いづれにせよ、山崎美成の随筆は漢字文義謎が近世日本における受容を考察するための恰好の資料であり、その背後

に『猜彙』のような手記が存在するという事実に興味深い。そこで本稿は、デジタル複写をもとに、当該稿本の翻刻を行い、研究者の参考に供したい。

凡例

原文の訓読訓点を省略し、読みやすくするために、適宜句読点・濁点をつけ、形式を整えた。漢字は原則として新字体を使用するが、一部謎を解くために必要な旧字は元の字形を保留した。Unicode 外の文字は、Unicode 文字に改めた。判読不能文字・難読字は□、稿本に見られる原注は（ ）、読み仮名は「 」、筆者による文字校訂・補注・推定事項は「 」（ ）で示し、丁に通し番号を付け、表丁を「オ」、裏丁を「ウ」と表記した。

翻刻

1 オ 世説新語補

魏武嘗過曹娥碑下、楊脩徒碑背上、見題、作「黃絹幼婦、外孫璽白」八字。魏武謂脩曰、解不。答曰、解。魏武曰、卿未可言、待我思之。行三十里、魏武乃曰、吾已得。令脩別記所知。脩曰、黃絹、色絲也、於字為絕。幼婦、少女也、於字為妙。外孫、女子也、於字為好。璽白、受辛也、於字為辭也。魏武亦記之与脩同。乃嘆曰、我才不及卿、乃覺三十里。

2 オ 後漢書

楊秉、字叔節、震中子也。桓帝時為大尉、每朝廷有得失、輒尽忠規諫、多見納用。秉性不飲酒、又早喪夫人、遂不復娶。所在以淳

白称。嘗曰、我有三不惑、酒色財也。
(末ニ六論衍義万宝全書ノ抄録アリ)

2ウ

「酒財色」の文字絵

(此画絵本故事談卷六に見えたり)

317

東坡問答錄 宋蘇軾撰

坡妹与夫来往歌詩

東坡之妹聰慧過人、博學強記、尤工為文。有欲以秦少游議親者、妹索其所業視之。曰、秦之文粗足以敵吾子由之才。遂得諧伉儷。後子瞻在翰林日、妹往省行之。適佛印以長歌寄坡、有勉其退休之意。坡誦之、猶少凝思。妹從旁適見之、一覽了然。嘆曰、使汝作男子、名位必在我上。妹因喜得縱觀翰苑未見之書、乃遣价報書於秦、
〔丁付〕十七

姑遲其婦、因錄佛印歌以示秦云、歌曰、

野野 鳥鳥 啼啼 時時 有有 思思 春春 氣氛 桃桃 花
花 發發 滿滿 枝枝 鶯鶯 雀雀 相相 呼呼 喚喚 岩岩
畔畔 花花 紅紅 似似 錦錦 屏屏 堪堪 看看 山山 秀
秀 麗麗 山山 前前 煙煙 霧霧 起起 清清 浮浮 浪浪
促促 潺潺 浚浚 水水 景景 幽幽 深深 处处 好好 追
追 遊遊 傍傍 水水 花花 似似 雪雪 梨梨 花花 光光
皎皎 潔潔 玲玲 瓏瓏 似似 墜墜 銀銀 花花 折折 最
最 好好 柔柔 茸茸 溪溪 畔畔 草草 青青 双双 蝴蝶
蝶蝶 飛飛 来来 到到 落落 花花 林林 裏裏 鳥鳥 啼
啼 叫叫 不不 休休 為為 憶憶 春春 光光 好好 楊楊
柳柳 枝枝 頭頭 春春 色色 秀秀 時時 常常 共共 飲
飲 春春 濃濃 酒酒 似似 醉醉 閑閑 行行 春春 色色

裏裏 相相 逢逢 競競 憶憶 遊遊 山山 水水 心心 息
息 悠悠 婦婦 去去 来来 休休 役役
秦少遊答短歌云、

未及梵僧歌 詞重而意復
字字似聯珠 行行如貫玉
想汝唯一覽 顧我勞三復
裁詩思遠寄 因以真類觸
汝其審思之 安表予心曲

並疊字詩一首

別離時間漏轉

憶 期歸阻久伊思 静

秦之書信既到、值坡与妹遊湖上、得秦詩且会其意。因觀物用其体、即成採蓮歌云、

坡妹採蓮疊字詩一首

闕新歌声嗽玉

一 採

津楊綠在人蓮
東坡亦和疊字詩一首
力微醒時已暮

酒 賞

飛如馬去婦花

東坡書字意成詩。北虜使至、每以能詩自矜。朝廷議以東坡館伴之。使者索賦詩、坡曰、賦詩易事、觀詩稍難耳。因出長亭詩以示之。詩云、

亭 景 畫 老 詩 節
首 雲 暮 汪 藥 峯

環疊字詩及東坡效体詩、精敏者一見、固可以決。又恐有如虜使終

日疑思不辨者、今逐一明解于下。佛印長歌云、

野鳥啼 野鳥啼時時有思 有思春氣桃花發 春氣桃花發滿枝
滿枝鶯雀相呼喚 鶯雀相呼喚岩畔 岩畔花紅似錦屏 花紅似錦
屏堪看 堪看山 山秀麗 秀麗山前煙霧起 山前煙霧起清浮
清浮浪促潺湲水 浪促潺湲水景幽 景幽深處好 深處好追遊
追遊傍水花 傍水花似雪 似雪梨花光皎潔 梨花光皎潔玲瓏
玲瓏似墜銀花折 似墜銀花折最好 最好柔茸溪畔草 柔茸溪畔
草青青 双双蝴蝶飛來到 蝴蝶飛來到落花 落花林裏鳥啼叫
林裏鳥啼叫不休 不休為憶春光好 為憶春光好楊柳 楊柳枝枝
春色秀 春色秀時常共飲 時常共飲春濃酒 春濃酒似醉 似醉
閑行春色裏 閑行春色裏相逢 相逢競憶遊山水 競憶遊山水心
息 心息悠悠歸去來 歸去來休休役役

秦少游詩云、

靜思伊久阻歸期 久阻歸期憶別離
憶別離時間漏轉 時間漏轉靜思伊

東坡妹採蓮詩云、

〔丁付〕二十一

採蓮人在綠楊津 在綠楊津一闌新
一闌新歌声漱玉 歌声漱玉採蓮人
東坡詩云、

賞花歸去馬如飛 去馬如飛酒力微
酒力微醒時已暮 醒時已暮賞花歸

東坡長亭詩云、

長亭短景無人畫 老大橫拖瘦竹筇
回首斷雲斜日暮 曲江倒蘸小山峯

8-10才

谷響統集卷三

謎 用字

客問支那謎 答略拳一二、以資雅談。古之庾〔庾〕詞、即今之隱語、而俗所謂謎也。玉篇謎字註云、隱言也。人皆知其始於黃絹幼婦、而不知目〔自〕伍季曼倩時已有之矣。至鮑照集、則有井字謎。自此雜說所載、間有可喜。用字謎云、

一月復一月 兩月共半辺

一山又二山 三山皆倒懸

上有可耕之田 下有長流之川

〔丁付〕二十八

六口共一室 兩口不团円（齊東野語）

井字謎

程大昌（演繁露卷七謎）曰、古無謎字、若其意制、即伍季東方朔謂之（為）隱（者）是也。隱者、藏（蔽）匿事情不使暴露也。（至鮑照集則有謎矣。玉篇亦收謎字、积云、隱也。）即後世之謎也。鮑昭（之）井謎曰、一八五八、飛泉仰流。仰（也）（ママ）流者、垂綆取水而上之故。曰、仰流也。一八者、井字八角也。五八者、折井字而四之、則其為十者四也。四十即五八也。凡謎皆仿此。（演繁露）

儉字謎

世俗為善謹者、多拆字為謎。然無文理極多不足稱。伝説、曩閑同僚推坐者、閑拳儉字謎。一人立、三人坐、兩人小、兩人小、其中更有一二口。恐多有所本、非一時所能撰。其正大明白、真善謹而有益者、豈特可助談話而已。故筆之也。（宋洪翼暘各〔谷〕漫錄）

千字文謎

佛印持二百五十錢示東坡曰、与爾商此一箇謎。東坡思之少頃、謂曰、一錢有四字、二百五十箇錢、乃一千箇字、莫是千字文謎乎。佛印笑而不答。（東坡禪喜集）

譏荊公隱語

荊公柄國時、有人題相国寺壁云、

終歲荒蕪湖浦焦 貧女戴笠落柘条

阿儂去家京洛遥 驚心寇盜來攻剽

人皆以為、夫出婦憂、荒乱也。及荊公寵相子瞻、召還諸公飲蘇寺、終以此詩問之蘇曰、于貧女句可以得其人矣。終歲、十二月也。十二月為青字。荒蕪、田有艸也。艸田為苗字。湖浦、焦水去也。水旁去为法字。女戴笠、安字。柘落木条、剩石字。阿儂是吳言、合吳言為誤字。去家京洛為国。寇盜為賊民。蓋言「青苗法安石誤国賊民」也。(宋袁褱楓窓小牘)

10ウ 谷響統集卷七

参同契隱語

参同契後敘云、

会稽鄙夫 幽谷朽生
委時去害 依託丘山
循遊廖廓 与鬼為鄰
百世一下 邀遊人間
湯遭厄際 水旱隔屏
会稽魏伯陽五字。魏字作巍、故云丘山。

11 軍林宝鑑

軍務第九

太公使周公旦為相、先令齋七日。而後、授与若此之大要、夙对。獻出之山卯、当左掌握心端、伸右掌五指向外、一度招下之。呪曰、臣人相对並三口(臣人品相合作臨字)。当右掌握心端、伸左掌五指向外、一度招下之。呪曰、十六兩下添一八(夏傑以降一十六兩為斤、斤一八相合作兵字)。兩掌向外置在乳辺、呪曰、門裏栽豆長一寸(門豆寸相合作闕字)。兩掌横推兩乳端、呪曰、二十日中下十斜(十日日相合作者字、下一十斜)。拳兩掌押兩乳端、呪曰、兩兩相並金鳥飛(金鳥則日也。ヒヒ日相合作皆字)。伸兩掌向身掛兩肩、

呪曰、小猿獨立只牽車(猿、猶邑。小邑古文作𠂔、𠂔車相合作陣字)。兩掌向身押腰間、呪曰、殘字脱右利脱左(殘字脱右則歹、利脱左則刀。刀、リ也。歹リ相合作列字)。兩掌伸押兩膝、呪曰、擘一力人前抱土(二人土相合作在字)。拳兩掌成斗衝、呪曰、九月中旬磨一刀(八一算合成九。刀則リ也。八一月リ相合作前字)。此上九者、秘于天、陰于地(天地者、君臣也)。

12オ 桂林漫録卷下

市語

往年薩州ノ人ノ隱語ニテ豁拳「ケン」ヲ打ヲ見タリシガ、一ヲタシソコ、三ヲヨコカハ、七ヲ毛ノ尻、九ヲ丸マラズ、ナトト云タルヲ、興アルコトトノミ聞過セシガ、此頃堅瓠集ニ委巷叢談ノ市語ヲ載シヲ見テ、始テ唐山ノ市語ナル事ヲ知ル。「杭人三百六十行、各有市語(中略)不若吾鄉市語有文理也。一為旦底、二為斷工、三為横川、四為側目、五為鬻丑、六為撒大、七為毛根(一作皂脚)、八為入開、九為未丸、十為田六(心)。」全ク是ヨリ出タルナリ。

12ウ 孫姬式の継警の歌

鼠の家米つきふるひ木を切てひきゝり出すよつといふやこれ
これは「あなこひし」ということなり。
(美成案二、ひきゝり出すハ、ひをきり出すノ訛トスル)
(鼠ノ家(穴「アナ」)米ツキフルヒ(粉「コ」)木ヲ切テヒキキリ出ス(ヒ コノヒハ火ニイヒカナヘテ火切白火切杵ノコトニヤ)ヨツ(四「シ」)ト云ヤコレ

13才 源順家集

五日さうふにつけて有所に奉る

進上「こゝろさし」 深「ふかき」

右葉之菖蒲草「みきはのあやめくさ」 千年五月五日可刈「ちとせ

さつきいつかかるへき」

進上「たてまつりあげる」

右葉之菖蒲草「みきはのあやめくさ」 千年五月五日可刈「ちとせ

さつきいつかかるへき」

14 古今著聞集卷十九

堀川院の御時五月五日江師菖蒲をたてまつりたりける状に

進上 水辺ノ菖蒲

千年五月五日 大江ノ為武

この状を殿上にいゝされて人々によめと仰られけれども、誰もその心をする人なかりけるに、師頼卿その時弼の少将とてさふろひけるが、あんしえてよみ侍ける。

たてまつりあくる かわへのあやめくさ

進 上 水辺 菖蒲

ちとせのさつきいつかたへせん

千年 五月 五日 大江為武

15 「別紙 下半部に環旋詩」

花上八字、枝間八字、環旋読之、四字為句、通相為韻。其盤屈糾結為八枝者、左旋読之、自篇字起、至詞字止、当就支脂字韻。右旋読之、自詞字起、至篇字止、当就先仙字韻。

16才 鄰女晤言卷下 洛東 慈延著

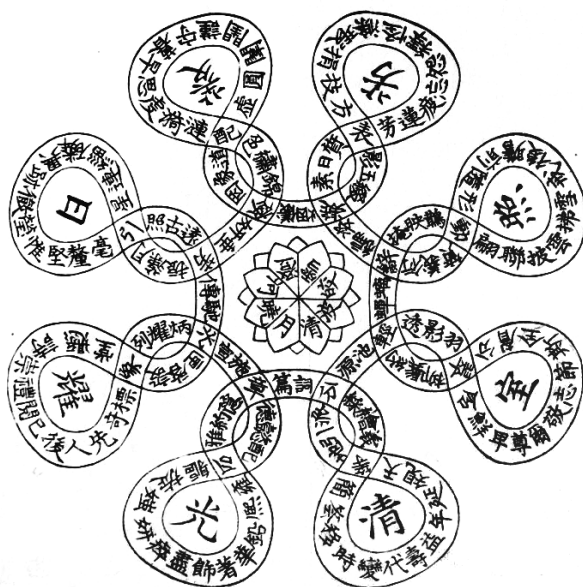
さいつ頃澄月法師八十の賀に杖を贈るとて、

進上

長節竹杖

万年月

以上 坂為成



右環輪八花鉤枝鑑銘、唐上元初、南海女子所製。其辞致幽妙而含箴規、真有古詩人之風。王勃之叙、令狐〔狐〕楚之跋、皆極口稱贊、猶之錦上添花矣。

文政十年「一八二七」歲次丁亥正月山崎美成識

と豎紙にかきて出したりしに、その座にてよみとく人なかりき。
こゝろさすなよ竹の杖よろづとしつきもてのぼる坂のためなり
とよむなり。

16ウ 「別紙」

虞初新志（卷十一之十五右）顧理美が聞見扈言曰、本朝順治間、
福州飢、晷錦坊有売米者、雷震死其三人。有字大書屍上、其文曰、
六口月八辰口月入二直

無人識者。人題之於万寿塔壁。夜有蜘蛛垂絲於字之中、直貫而下、
視之、乃「米中用水、康中用木查」九字也。詢知其人平日果然、
天誅不爽矣。

（按ズルニ、事文類聚ニ載、米商ノ屍上ニ「二口口月八三」ノ文字
アリ。人ヨムコトアタヘズ、馬ニ乗テ来ル人アリ。コレヲ見テ持
テル鞭ヲ中ニアテテ見スレバ、「市中用小斗」ト云字トヨンダリト
云フ。右ノ順治間ノ事大ニ似タリ。安政丙辰五月二十五日書直。
書之補情「猜」彙。

再按ニ、二口口月八三「ジケイコウゲツハツサン」中とほす悔草
に見えたり覚る）

17 江談抄 卷中

嵯峨天皇御時落書多々事

嵯峨天皇御時無惡善ト云落書世間に多々也。篁読云、「無惡（サク
ナクハ）善（ヨカリナマシ）ト読」云々、天皇聞之給テ、篁所為
也ト被仰テ、蒙罪トスル之処、篁申云、「更不可作事也。才学之
道、然者自今以後可絶」云々。天皇尤以道理也。然者此文可読ト
被仰令書給。

十廿世五十、海岸香（有怨落書也）

二口口月八三、中トホス（市中用小斗）

唐ノケサウ文谷傍有欠（欲日本返事）

木頭切月中破（不用）

一伏三仰不来待書暗降雨幕漏寝（如此読云々）

栗天八一浴（加坂都）

或令為市ニハ有砂々々

又左繩足出（志女砥与布）

18 宇治拾遺物語卷三

小野篁広才事

いまはむかし、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の御門の御とき
に、内裏にふだをたてりけるに、無惡善とかきたりけり。御門、
篁に「よめ」とおほせられたりければ、「よみはよみさぶらひな
ん、されどおそれにて候へば、え申さぶらはじ」と奏しければ、
「ただ申せ」と度々おほせられければ、「さがなくてよからん」と
申て候ぞ、されば君をのろひまひらせて候なり」と申ければ、「お
のれはなちては、たれが書ん」と仰られければ、「さればこそ、申
さぶらはじとは申て候つれ」と申に、御門、「さてなにかきたら
んものはよみてんや」と、おほせられければ、「なにゝても、よみ
さぶらひなん」と申ければ、片かなのねもじを十二かゝせて給て、
「よめ」と仰せられければ、「ねこのこの子ねこ、しゝの子のこ
じゝ」とよみたりければ、御門、ほゝえませたりひて、事なくて
やみにけり。

19 十訓抄卷八

嵯峨帝御時、「無惡善」と書ける落書ありけり。野相公にみせらるるに、「さがなくてよし」とよめり。「惡」は「さが」といふよみのあるゆへ、みかどの御けしきあしくて、「さては臣が所為か」と仰られければ、かやうの御うたがひ侍るには、智臣朝にすゝみがたくや」と申ければ、御門、

一伏三仰不来待書暗降雨恋筒寝

とかゝせ給て、「是をよめ」とて給はせけり。

月よにこぬ人またるかきくらしあめもふらなん恋つゝもねん
とよめりければ、御けしきなをりにけりとなん。おとし文はよむ所にとがありと云こと。是より始るとかや。わらはべの「うつむきさい」といふものに、「一つふして三あふぬける」を「月よ」と云也。

20 源平盛衰記卷二十

小兒読誦誦事

兼隆被討後日ニ追善アリ。修行者ヲ招請シ唱導ヲ勤ケルニ、色々ノ捧物ニ思々ニ志ヲ載タリ。其中ニ一紙ノ誦誦アリ。導師、是ヲ読煩タリケルニ、聴衆ノ中ニ五歳ノ小兒アリ。此誦誦ヲヨマント云ケルヲ、乳母イカニトシテカト、制シケレ共、膝ノ上ヨリ頷下「クツレヲリ」高座ノ下ニ歩寄テ、

法「ノリ」ノ花終「ハナツイ」ニヒラクル八牧「ヤマキ」ニハ心仏ノ身トゾ成ヌル

ト、不思議ナリケル事也。

21 才 野馬台詩

始定壤天本宗初功元建
終臣君周枝祖興治法主
谷孫走生羽祭成終事衝
填田魚膾翔世代天工翼
孫子動戈葛百国氏右輔
昌微中干後東海姬司為
白失水寄胡空為遂国喧
龍游窘急城士茫茫中鼓
牛飡食人黃赤興丘青鐘
腸鼠黑代雞流畢竭猿外
丹尽後在三王英称犬野
水流天命公百雄星流飛

21ウ 半陶藁(二ノ五十七才) 走筆三荷葉有月有水

有客出扇、謂余曰、是曲觴流水図也。余披而見之。緑荷三莖、上有微月、下有清流。流觴之謂、安在哉。按書史会要、記本朝四十七箇字母、且曰、月則云「つき」。余由是推之、三荷両字擬之倭字、則近「さか」也。又觴一字訓之倭語、則云「さかつき」也。噫、于漢言、于倭語、如華梵兼筆者。誰謂之非流觴乎。所恨不使義之書於此扇也。一笑。

22 23 桂林漫録卷上

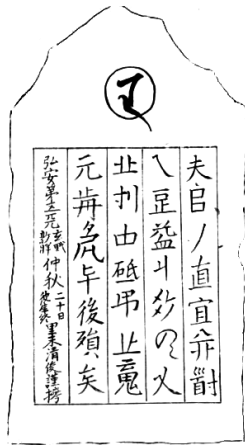
燕沢碑

奥州宮城郡燕沢ニ在リ、祖元和尚(仏光禪師ト諡ス)ノ建ル所ナリ。ソノ文殆ド読難シ。此碑ヲ造リ、遠ク此地ニ樹タル志趣ハ、

弘安四年元ノ世祖我朝ヲ襲ント欲シ、蒙古高句麗ノ兵ヲカタラヒ、八角島ノ澳マデ寄来リシガ、八月朔日ノ夜、颶風起テ三千ノ櫓艦ヲ覆シケレバ、十万ノ兵士尽ク魚鼈トナリ、生テ還ル者、莫青、于闐、吳万五（俗ニ万戸將軍ト云ハ是ナリ）三人ノミ。祖元ハ元人ナリ弘安二年、北条時宗ノ命ニ応ジテ渡杯シ、鎌倉ノ円覺寺ニ住ス。此歳元兵覆溺ノ小祥ニ当レルヲ以テ、

丁付十一

私ニ一塔ヲ造立セマク欲レドモ、憚ル所無ニシモ有サレバ、人ノ白地〔あからさま〕ニ読得ザランガ為、古文離合ノ体ヲ以テ文ヲ書シ、碑額ニ一円相中、梵文ノ羅字ヲ題シテ浮図ニ換（羅字ヲ觀レバ、凡夫モ成仏シ、迷途ノ枉魄ヲ救フト、大日經九字秘釈ニ載ス）猶モ東奥隱僻ノ地ヲト「ボク」シテ、植タルニテハ有ケリ。土人塩亭ナル者、此文ヲ訳シ、考証一篇ヲ著ス。卷ヲ開テ鏡校スルトキハ、文意渙然トシテ、水ノ如ク釈ク。実ニ此碑ノ叔孫通ナル哉。塩亭ノ次子君卿ヨリ、拓本一幅、參証一冊ヲ得テ、架二挿ム事ヲ得タリ。其註釈ヲ撮テ、左ニ見ス。



山僧来

山鳥偷果問

山雲飛片々食道

山長路幽深

金山寺

山花発茂林

山水碧沈々吟尋

山猿抱樹相

山容還

山長路幽深、山花発茂林。山雲飛片々、山水碧沈々。山鳥偷果食、山猿抱樹吟。山僧来問道、山客還相尋。

25ウ

男色今鑑

〔大者是念〕の合わせ文字〕（この文字を歌にして神社に奉納せしに、その心のしられざりしに、一その歌にとくよし。

おこりとは日下〔ひのした〕人の二タこゝろ本者是念のせひなりけり。

乙未七月四日柳菴主人閑話の儀を記す。未ダ本書を見ず。）

明良洪範卷七 関ヶ原へ御出陣の御途中、清洲御泊の夜、御夢に是といふ字を御覧ありけり。この時、あし利学校の三要閑室を御供に召連られしかば、則召れて、右是の字の事御尋ねなりし、三要申上がは、是といふ字は日の下の人と申候。則天下に御一人と申事にて、誠に目出度御夢にて候、と判じける。三要よき才覚を申上げるなり。

26

為人鈔卷七

第一為臣者宜工夫文字之弁

音智有人ノ謂ルハ、人ノ臣タラン者、宜工夫深察。

天空地

上 口 下

反復相因

（大田全斎云、右上口下の反覆相因といふのは、上字をさかさまにして、中の口字へ貫き、下字の下をさすにして、口字へ貫かしむれば、上下の豎画にて、口字、中字となれり。そのたとへば、君臣は意などたりては、あしきものゆへに、上下の本を通はして、中の口字はその君臣の中に云ふもの。その意をして通はしむるなり。ゆへに、口字、中字となれり。この事のたとへなりといふ。白川侯の鸚鵡討〔言〕に、下情をいづる条に、その終行に、上の字を覆とは、下の字をかへせば、又上の字になるや。上下の間に居て、その情を通するを以て、中の字は口を上下に貫くにこそあれ。）

27

〔別紙〕立教詳義 大田方撰

〔下中上〕の合わせ文字

上のを下にくだりて、下のをかみにのせりて、中とこそなれ。

此御詠は、ある人の上中下三字の説と云ものあり。これに本づきのかひて遊ばされたるなり。三字の説は、

上 口 下

如き、上の白字（の上字）なるは、口といふ字。下は白字の下字。ある時、かみの白字の上字、下にくだるときは、下となるもの。白字の下字、かみにのぼる時は、上となる。かくのごとくに、上下たゆたはりて、なかに中の形をなす。是天地位し中、和の気なるに象どれり。易に泰の国と申あり。三三是なり。この卦は、乾は下にして、坤は上なり。是、物は峰里上〔のぼ〕れるにかたどれり。人事を以「もつて」云。時は上なる人

体の本を推て、下をあはれみ、下たるものは誠の心をやどして、上につかへまつる。時はその志ともにつうじて、朝廷安泰なり。美成云、御詠と云ものは、福山侯の先君なるべし前廿一首の教訓の歌を、大田氏の記したるものなり。

28才 大和名所図会

久米寺宝塔中真柱銘

月九「ヲレカカツテ」中岸閑居一一「タレヲカマツ」
露五「シヲレテ」迷体弘身一一「ヒトリヒロマラズ」
法一「ヒトリ」不一「ヒロマラズ」随一「タタクニ」一一「ヒカリヲマス」

道一「ヒトリ」不一「ハビコラ」時節一一「ヒトヲマツ」
或云、空海之手蹟。而高野山妙瑞和尚為之附訓。

28ウ (別紙)

これは沢庵和尚の作なるよし。

丁亥冬十一月十四日、文宝亭にて観たり。

美成記

案に、「なみ立し、あとのしら波、立しあと」と云。

発句にて禅機の無一物の意などにやあたん。



29 遠碧軒記

青蓮院殿にへمامシヨ入道の四百年以前のものあり。その筆者不知惜哉。寺田無禪話」

(美成云、あるふるき写本に、見聞集とのみうはぶみしたる書に、葉宝大納言為自画自讃。)

世の中をらくに
へまむしよ入道
あればあるまま
なけりやそのぶん



山の井

絵に似たるかほやへمامシ夜半の月(雛屋立圃)

(再案に、此類なを少からず。の虚無僧を画かけるなど、いと多かり。枚挙に遑あらず。

山水天狗

清朝にて書ける賀春禧單の「招财進寶」の合わせ文字」といへる文字にて宝船の形を記するも、同じ類ひと云へり。)

30才 慈眼大師之語

今後智 法落納 善仏止
一生善 前度慎 一心悟
前安見 急無立 惡同起

(或云、神祖の御枕屏風に書ける所なりと。大田全齋云、この語、世に光国卿作ともいへりと。)

30ウ



唯吾知足

(大田全斎云、福山侯所蔵の明画漁家楽之図あり。その画にこの印を押してありとぞ。)

31
37才

空山藤先生富士後編卷之五

題士山玉連環文

一山頭出四山頭
出四山頭映水流
映水流百千万影
百千万影一山頭

全七言

仰雪看時心自閑
時心自閑愛高山
愛高山厭利名路
厭利名路仰雪看

士山双合文 五言

山雲
山容難長
山寒恒有求起
山大扶桑地雪藥麓
山高日域天煙仙巔
山鬱屢生化浸
山人自集
山海

士嶺双合 七言

山下幾千
山溪風冷旅難
山水常凍如玉人作
山頭載雪老翁容色嘯嶺
山勢拄天富士峰峰蹤宗
山煙時起似狼客為
山路雲埋仙可
山中第一

士峰火焰文 七言

自山脚至上煙

辺
山
雪海
埋腰
雲山山
山山山
煙山肩林
上石雨
頂山山
山作
川脚
山
山

士山双合文 七言

山併旦為

山仙在在獵蒐

山頭蓬容渠水為松

山葉弁雪滿遊我人爭林

山八樓月帶無風隴朦朧

瓊坐中九清巢霧繞

山夏谷穴雲室

山幽少家

題富巔珊瑚桃 七八言

明月天地露文

風吟人吟人誰

清人問山去貫

海幾入靈更一

碧峰雪尋難心

士嶺十文字

西
長
在
月
山
北
欲
星
纏

題士山新賦的中方角文

影清千里光

巔 滿

山 雪 一

富 天

合一天千里

題富峰新裁双合文 五言

雪影欺新月脚

雪花開四序潔山

雪滿更無谷終日齧

雪堆不露巔雪腐雪履

雪積豈礙煙雪眼雪衣

雪凝何有仙暫時懸

雪色歷千年眠客

雪心知古賢肩

新製為士峰雲雪論双合文

白雪

白雲漫留

白雪絳千雨露

白雲欺清雪歲脚嶺

白雪似良知時肌曦

白雲散一人蔽

白雪潔簇

白雲

新作富士八葉文

百七十三廿一左

顯白道理。

(再按ニ錢志新編古金ノ部ニ齊大公貨アリ。大公ノ二字否ニ作ルハ、全ク二字ナリ。サレバ、恐クハコノ合同トソノ体ナラン)

普陀山志卷三(七ウ)梵刹

(陔余叢考三十三ノ八ウ、合同ノ条可併考)

太古堂僧海涵、居此四世。孫普壽通佩重修、涵為寺住持、退居上官厅、子孫相繼居之。甲戌年常住買東房地二間易之。乃遷居。寺左有合同契存。

41-51才

文体明弁附録卷之一 大明吳江徐師曾伯魯撰

雜體詩

盤中體(作詩写之盤中、屈曲而成文也。)

盤中詩

漢蘇伯玉妻(史失其姓)

(伯玉被使在蜀久而不歸。其妻居長安思念之、因作此詩。)

山樹高 鳥鳴悲 泉水深 鯉魚肥 空倉雀 常苦飢 吏人婦 会夫
希出門望 見白衣 謂當是 而更非 還入門 中心悲(韻重) 北
上堂 西入階(叶堅奚反) 急機絞 杼声催 長嘆息 当語誰 君
有行 妾念之 出有日 還無期 結中帶 長相思 君忘妾 未
[天] 知之(韻重) 妾忘君 罪当治(平声) 妾有行 宜知之(韻
重)(再) 黃者金 白者玉 高者山 下者谷 姓者(為) 蘇 字伯
玉(韻重) 人才多 知謀足 家居長安身在蜀 何惜馬蹄歸不數
(音速) 羊肉千斤(一作觔) 酒百斛 令君馬肥麦与粟 今時人 知
四足(韻重) 与其書 不能說 当從中央周四角(葉虞谷反、言此
詩当如此說也。)

迴文体(按回文詩始於苻秦竇滔妻蘇氏。反覆成章、而陸龜蒙則曰、悠悠遠道獨營營、由是反覆興焉。及考詩苑云、回文反覆、旧本二体。止兩韻者謂之回文、举一字皆成說者謂之反覆。則蘇氏詩正反覆体也。後人所作、直可謂之回文耳。以今合而為一、故並列之。)

織錦回文

苻秦婦蘇蕙

晉陳留令武功蘇道實第三女也。名蕙、字若蘭。年十六、歸竇滔。滔堅寇襄陽、以滔為安南將軍、留鎮襄陽。滔携寵姬趙陽台往、蕙怨之、不肯与俱。而滔竟与断音問。後蕙悔恨自傷、因織錦為回文、縱広八寸、計八百余言、縱横反覆、皆成文章。名曰璇璣圖。因以寄滔、滔覽之、感其意、於是迎蕙、以来而歸陽台於閨中、恩好愈篤。(按此詩讀者不能悉其曲折、後有起宗道人分為七圖、著說法十一篇、得其三五四七言詩三千七百五十二首。乃知此詩反覆無窮之妙也。今不二以示例云)

讀法略例

仁智懷德聖虞唐	貞妙顯華重榮章	臣賢惟聖配英皇	倫匹離飄浮
江湘(右第一行順文直讀)			
津河隔塞殊山梁	民士感曠悲路長	身微憫己処幽房	人賤為女有
柔剛(右下方橫一行向左順讀)			
親所懷想思誰望	純情志潔齊冰霜	新故感意殊面牆	春陽熙茂凋
蘭芳(右末行向上逆讀)			
琴清流楚激弦商	秦曲堯声悲催藏	音和詠思惟空堂	心憂增慕懷
慘傷(右上方橫一行向右逆讀)			
仁智懷德聖虞堂	真志篤終誓穹蒼	欽所感想忘淫荒	心憂增慕懷
慘傷(右一角第一層方說、余三角放(倣)此)			
欽岑幽巖峻嵯峨	深淵重涯經網羅	林陽潛曜翳英華	沉浮異遊頽
流沙			
麟鳳離遠曠幽遐	神精少悴愁兼加	身苦惟艱生患多	股憂纏情將
如何(以上上中心方說)			
智懷德聖虞唐真	妙顯華重榮章臣	賢惟聖配英皇倫	匹離飄浮江
湘津(右第一行退一字順文直讀、末行及上下二橫行可以類推。)			
智懷德聖虞唐真	志篤終誓穹蒼欽	岑幽巖峻嵯峨深	微至嬖女因佞
臣(右一角第一層退一字順文直讀、斬左橫讀復順文直讀、軫右橫			

嗟中君容曜多欽 思傷君夢詩璇心 氏辭懷感感知麟 神輕聚散哀
春親（右第一角遞退一字、斜穿第四角讀。余三角做此○以上並七
言四句）

嗟嘆懷 傷中情 家無君 朗鏡明 葩紛光 誰為榮（右一角三行
左右轉摺讀。余三角做此○右三言六句）

嗟嘆懷 所離經 遐曠路 傷中情 家無君 房幃清 華飾容 朗
鏡明 葩紛光 珠曜英 多思感 誰為榮（右一角六行左右轉摺讀。
余三角做此○右三言十二句）

召南周風 興自后妃 衛鄭楚樊 厲節中闌 詠歌長嘆 不能奮飛
齊商双舜 歌我衰衣 曜流華觀 冶容為誰 情徵宮羽 同聲相追
（右上方第一層從中行借左三字向右讀。余三方做此○右四言十二
句）

周風興自后妃 楚樊厲節中闌 長嘆不能奮飛 双舜歌我衰衣 華
觀冶容為誰 宮羽同聲相追（右上方第一層除中行向右讀。余三方
做此○右六言六句）

周風興自后妃 召伯窈窕淑姿 楚樊厲節中闌 衛女河広思婦 長
嘆不能奮飛 詠志遐路逶迤 双舜歌我衰衣 齊興碩人其碩 華觀
冶容為誰 曜榮翠粲威蕤 宮羽同聲相追 情傷感我情悲（右上方
第一層除中行左右互轉分讀。余三方做此○右六言十二句）

龍虎繁文藻 榮曜華凋旗 容飾觀壯麗 充顏曜繡衣（右上方第二
層左右轉摺讀。余三方做此○右五言四句）

思感自寧 孜孜傷情 時在君側 夢想勞形（右一角第二層左右轉
摺讀。余三角做此。）
詩情明顯 怨義興理 辭麗作比 端無終始（右中心方讀○以上並
四言四句）

泊雁回文（五言律二）

宋王安石

泊雁鳴深渚 收霞落晚川 柝隨風斂陣 樓映月低弦
漠漠汀帆轉 幽幽岸火燃 壑危通細路 溝曲繞平田

龜山廻文 宋周

潮回暗浪雪山傾 遠浦漁舟釣月明 橋對寺門松徑小 檻當泉眼石波清
迢迢綠樹江天曉 藹藹紅霞海日晴 遙望四辺雲接水 碧峰千点數陽輕

回文（五言排律）

齊王融

枝大柳塞北 葉闊榆關東 垂條逐絮轉 落蕊散花叢 池連照曉月
幔錦扞朝風 低吹雜綸羽 薄粉艷粧紅 離情隔遠道 嘆結深閨中

後園作回文（五言絕句）

齊王融

斜峰繞徑曲 聳石帶山連 花余弘戲鳥 樹密隱鳴蟬

和湘東王後園回文（五言絕句）

梁簡文帝

枝雲間石峰 脈水侵山岸
池清戲鵲聚 樹秋飛葉散

題織錦回文（七言絕句○本三首今取一首）

宋蘇軾

春晚落花余碧草 夜涼低月半枯桐
人隨雁遠辺城暮 雨映疎簾繡閣空

藁砧体

藁砧四首

古辞（撰人闕）

藁砧今何在 山上復有山 何当大刀頭 破鏡飛上天（藁砧今何在、
言「夫」也。山上復有山、言「出」也。末二句言「月半当還」也。）
（卷二 雜名詩）

按離合詩有四体。其一、離一字偏旁為兩句、而四句湊合為一字。
如「魯國孔融文舉」「思楊容姬難堪」「何敬容」「閑居有樂」「悲
客他方」是也。其二、亦離一字偏旁為兩句、而六句湊合為一字。
如「別字詩」是也。其三、離一字偏旁於一句之首尾、而首尾相
續為一字。如「松間酌」「飲巖泉」「砌思步」是也。其四、不離

偏旁、但以一物二字離於一句之首尾、而首尾相統為一物、如原名、藥名離合是也。他、如「口字詠」、則字字皆藏口字也。藏頭詩、則每句頭字皆藏於每句尾字也。雖非離合、意亦近之、故取以附焉。此外、又有歇後詩、如拙字詩云、当初只為將勤補、到底翻為弄巧成。酒字詞云、斷送一生唯有破除万事無過之類。滑稽之極、一至於此、良可嘆也。故今不錄、姑附其說於此云。

郡姓名字詩（魯國孔融文學○四言）

漁父屈節 水潛匿方（離魚字）

与崑（古時字）進止 出行施張（離日字○魚日合成魯字）

呂公磯釣 闔口渭旁（離口字）

九域有聖 無土不王（離或字○口或合成國字）

好是正直 女回于匡（離子字）

海外有截 隼逝鷹揚（當以截字離乙字。今不可曉、恐古今文異也。

○子乙合成孔字）

六翮將奮 羽儀未彰（離鬲字）

蛇龍之蟄 俾也可忘（離虫字○鬲虫合成融字）

玫瑰隱曜 美玉韜光（去玉成文、不須合）

無名無譽 放言深藏（離與字）

按轡安行 誰謂路長（離才字○与才合成舉字）

離合（思楊容姬難堪○四言） 晉潘岳

佃漁始化 人民穴處（離田字）

意守醇樸 音庇律呂（離心字○田心合成思字）

桑梓被原 卉木在野（離木字）

錫鸞未設 金石弗萃（離易字○木易合成楊字。以易作易恐不切）

害咎蠲消 吉德流普（離亾字、吉字上少一画、恐亦不切）

谿谷可安 奚作棟宇（離谷字○亾谷合成容字）

嫣然以喜 焉惧外侮（離女字）

熙神委命 已求多祐（離匝字。已下少火、恐亦不切。○女臣合成姬字）

嘆彼季末 口出呖語（離莫字）

誰能默識 言喪厥所（離佳字○莫佳合成難字）

壘畝之諺 龍潛巖阻（離土字）

渺義崇乱 少長失序（離甚字○土甚合成堪字）

離合詩贈尚書令何敬容（何敬容○五言）

伎能本無取 支葉復單貧（離亾字）

柯条謬承日 木石豈知晨（離可字○亾可合成何字）

狗馬誠難尽 犬羊非易馴（離句字、以句作苟）

數嘖既不似 学步孰能真（離父字○苟父合成敬字）

寔由紊朝典 是曰蠹彝倫（離亾字）

俗化於茲鄙 人塗自此分（離谷字○亾谷合成容字）

離合詩贈江藻（閑居有樂○五言） 陳沈炯

開門枕芳野 井上小紅桃（離門字）

林中藤葛秀 木末風雲高（離木字。木門合成閑字）

屋室何寥廓 至士隱蓬蒿（離尸字）

故人外賞 文酒易陶陶（離古字。尸古合成居字）

友朋足諧晤 又此盛詩騷（離ナ字）

朗月同携手 良景共含毫（離月字。ナ月合成有字）

鸞巴有妙術 言是神仙曹（離樂字）

百年肆偃仰 一理詎相勞（離白字。樂白合成樂字）

離合（悲客他方○雜言） 宋孝武帝

霏雲起兮汎濫 雨霽昏而不消（離非字）

意氣悄以無樂 音塵寂而莫交（離心字○非心合成悲字）

守辺境以臨敵 寸心屬於戎昭（離亾字）

閣盈図記 門満賓僚（離各字〇ハ各合成客字）

仲秋始戒 中園初凋（離イ字）

池育秋蓮 水滅寒漂（離也字〇イ也合成他字）

指婦塗以易感 日月逝而難要（当離一、未詳）

分中心而誰寄 人懷念而必謠（離刀字〇一、刀合成方字。但以八作

人、恐亦有誤）

離合（別〇五言） 宋謝靈運

古人怨信次 十日眇未央（離口字）

加我懷繾綣 口詠情亦傷（離力字）

劇哉婦遊客 処子勿相忘（離リ字〇口力リ合成別字）

即題離合

松間樹 唐陸龜蒙

子山園靜憐幽木 公幹詞清詠華門 月上風微蕭灑甚 斗醪何惜置盈樽

（木公合成松字、門月合成間字、甚斗合成樹字）

飲巖泉 唐陸龜蒙

已甘茅洞三君食 欠買桐江一朵山 巖子瀨高秋浪白 水禽飛尽釣舟還

砌思步 唐皮日休

襪襪古薜繚危石 切切陰蟄応晚田 心事万端何処止 少夷峰下旧雲泉

懷鹿門泉名離合 唐皮日休

山瘦更培秋後桂 溪澄閑數晚來魚 台前過雁盈千百 泉石無情不寄書

奉和懷鹿門 唐陸龜蒙

竹溪深處猿同宿 鬆閣秋來客共登 封径古苔侵石鹿 城中誰解訪山僧

答鄧陽客藥名離合 唐張籍

江皋歲暮相逢地 黃葉霜前半夏枝 子夜吟詩向秋桂 心中万事豈君知

夏日即事藥名離合 唐陸龜蒙

避暑最須從朴野 葛巾筠席更相当 歸來又好乘涼釣 藤蔓陰陰著雨香

口字詠（附）

和蔡黃門口字詠 陳沈炯

囂囂宮閣路 靈靈谷口間 誰知名器品 語哩各崎嶇

（卷二詠諧詩）

字謎體

字謎三首 宋鮑照

一形二体 四支八頭 四八二八 飛泉仰流

井

頭如刀 尾如鉤 中央橫広 四角六抽 右面負兩刀 左辺属双牛

龜

土

乾之一九 隻立無偶 坤之二六 宛然双宿

51ウ 「別紙」北国奇談巡杖記卷五

越前国永平禪寺は開基道元和尚にして、日本曹洞派の本山なれば、
今さらいふべくことあらず。元禄二年の葉月、芭蕉翁、奥羽行脚
したまふ折から、此寺を尋ねてまうでたまふに、方丈に雲竹の書
れし額あり。是に讀を残したまへる。其句を左に記す。

額曰

仄

西は風来舎東は桂男子 雲竹書

月と風裸にしたる角力かな 芭蕉

右は風月といへる字の謎なりとぞ。今はいかがなりしにや不知よ

し沙汰せり。

〔別紙の裏〕

虫二

松島夜話

52

石林詩話

宋 葉夢得

古詩有離合体、近人多不解。此体始於孔北海、余讀文類、得北海四言一篇云、「漁公屈節、水潛匿方、与时進止、出寺弛張。呂公磯釣、闔口渭旁、九域有聖、無土不王。好是正直、女回子臧、海外有截、隼逝鷹揚。六翮不奮、羽儀未彰、龍蛇〔蛇〕之蟄、比他〔也〕可忘。玫瑰隱耀、美玉韜光。無名無譽、放言深藏、按轡安行、誰謂路長。」此篇離合「魯國孔融文舉」六字。徐而考之、詩二十四句、每章四句離合一字。如首章云、「漁父屈節、水潛匿方、与时進止、出寺弛張。」第一句漁字、第二句水字、漁犯水字而去水、則存者為魚字。第三句有時字、第四句有寺字、時犯寺字而去寺、則存者為日字。離魚与日而合之、則為魯字。下四章須〔類〕此。殆古人好奇之過、欲以文字示其巧也。

53才

万宝全書卷四

万 昨日今朝事不同 光陰過隙若秋風
般 何須姦謀何須惡 命理無時摠是空
都
是
命

天理 「〔都是命也〕の合わせ文字」

半
点
不
由 誰能誰不能 能者要五行
人 五行若不順 能者也不明

53ウ

酒色作船頭氣作稍 逢橋須下馬
釀中間財酒兩相交
千

家勸君休在船頭坐
味四面皆是殺命乃

〔酒色財氣〕の文字絵

船酒若除之性不狂
行便將色戒濟生方
万

里財能義取天相佑
程忍氣興家少禍殃

有路莫登船

〔六諭衍義云、大約作非為的病根、不出酒色財氣四字。〕

54才

〔控書き〕

目ざまし草 煙草葉ノ類
佐渡みやげ やえだすき

別録之分 癸未〔一八二三〕孟秋三日 山崎美成輯

蓮房 九十六爻 顛倒死失 清朝

双六盤歌 田歌 源順

輦鑑詩 広東新語

54ウ

物徂来〔徠〕所藏唐墨

〔按ニ古梅園墨譜ニモコノ墨ノカタアリト覚エタリ。〕



(右回文真性頌 少室六門集三十一左ニアリ。)

55ウー56

浅草観音堂額ノ表

元和元年大明福建人徐紹勳書

語謚鱗鮮鶯広車駿

絶鐘自物吟今慈庇

筆暮渡節花古来求

円院江光悲□□□

通寺清風愁利氣尊

嶺連漣見蟬房肩子

是年神筵樹眠擊船

扶許三覽林昏前力

桑幾社漱中覚河風

東開玉觀鳥唄水帆

海門堂修交歌波石

天悲並乘響声降将

(横行反読「山是扶桑東海天、謚語絶筆円通嶺」而止。)

57才

〔別紙〕口状

過刻之東鑑之義申上候而、成之□□成しは、御蔵書御借被下置難有之候。□□竹尾氏へ借申候処、三四之卷となるも、初卷□□見え候間、先以申仕候故、来候此次に見付るになし。併御□□之御中、何共に恐入被存候。以上
十二月十九日 美成

〔口状の紙背に「円明淨至身滅照忘空理縁情性離真極妙常終始」の文字が円形に配列されている〕

達磨西来、不立文字、直指人心、見性成仏。独有真性一頌、雖二十字、回環読之、成四十首、計八百字、每首用韻、四至俱通、以表真性無有窮尽也。

58才

〔別紙 右の文字が見られる拓本

54ウ

の唐墨の裏か〕

58ウ

富士詩

山嵐聞松

山煙不絶天浮

山是三州蹈群武島

山円面向不背玉境代原

山巖端正微妙地殿毛浦

山頭四五鄰空帝子

山雪不消老田

山水染月

右山形ノ詩石田醒斎蔵。唐人ノ書トミヘタリ。

59才 [別紙 控書き]

藁砧体 詩轍三ノ廿六才 字謎 同上 同丁ウ(本朝文粹ニモアリ)
 凡鳥の事 斧の事 贈余雜録四ノ廿八ウ
 一ノ字の類 牛馬問四ノ八ウ 滾痰丸ノ詩 丹水子下ノ廿二才
 二つのじ 牛の角のじ つれづれ草 野槌上ノ五ノ廿一丁
 犀跖評竊賄之數(關史 下ノ廿五才 知不足齋ノ中)
 二首六身 左伝 秘笈中真珠船三ノ七ウ 離合体
 矢集ニ字謎あり
 桂林漫録上ノ十八才 硯蓋ノ銘 茅窓漫録 偏傍ノ条 鄭采題

付記 本稿は、JSPS 科学研究費補助事業若手研究21K12940「日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研
 究」(研究代表者: 具修テツ)の成果の一部である。